

再開発へ新たな機運

大手門通りすずらん商店街振興組合
理事長 船山 隆幸氏



「ヤットサー」「ヤット！ヤット！」9月の第1土曜日、今年も山形駅前エリアに阿波おどりの軽快なお囃子とともに威勢の良い掛け声が響き渡った。『東北は一つ、広げよう祭りの輪』を

合言葉に、『みちのく阿波おどり』が始まって今年で14年目。山形・福島の2県からスタートした祭りの輪は、東京高円寺阿波おどりの有名連、徳島出身の学生からなる関東学生連の応援も受け、今や宮城、岩手、青森と東北5県にまたがる大きな輪となった。祭りのクライマックス、総踊りでは、沿道の観客も皆踊る阿呆となって演舞場へ繰り出し、会場を包み込む熱狂の渦に参加者全員の心が一つになる。これぞ祭りの醍醐味といえよう。祭りで街を元気にしようと、企画から運営まで一緒に携わってくれた若者らに敬意を表するとともに、そこで形成されたコミュニケーションこそ活力ある商店街づくりの原動力であり、商店街が今後目指すべきソフト事業の柱になると考えている。

一方、もうひとつの街づくりの柱であるハード基盤に目を向けると、大手門通りすずらん商

店街は建築からすでに半世紀以上経過し、老朽化が顕著になっている。当商店街は東北初の防火建築帯の指定を受け、昭和32～38年にかけて商店街の80%を耐火建築化すると同時に両側3.5mのセットバックによりアーケード付きの歩道を新設、現在の商店街基盤が形成された。共同建築ビルに専門店が軒を連ね、ウィンドウショッピングの楽しさを備えた連続性のあるファサードは、当時「横のデパート」として名を馳せ、多くの買い物客が往来した。車道に覆いかぶさるように飾り付けられた七夕飾りや、アーケードの上に櫓を組んでの盆踊り大会、ウィンドウを活用した最上三十三観音出開帳など、華やかなりし一時代であった。

その後昭和40年代後半になると、山形駅前には大型店の出店が続き、商店街の業種構成も物販中心から飲食・サービス・テナント業へのシフトが進んで行く。この間も当商店街では統一カラーによる共同外壁塗装等のビルメンテナンス事業や、平成に入ってからは大掛かりな街路整備事業を手掛けるなど、快適な商業空間づくりに力を注いできた。だが50年という歳月は、商店街の旧態化に拍車をかけるとともに建物の躯体そのものにも経年劣化の影響を及ぼし始めている。こうした現状に商店街では度重なる再開発事業を検討してきたが、そこに立ちはだかったのは、皮肉なことに一世を風靡したモダンな共同建築というスタイルであった。

しかし、ここへきて再開発事業に対する機運は新しい局面を迎えようとしている。近年、飲食店街として賑わう当商店街に、若手の経営者が参入。若手同士の交流もあって、商店街が活力を取り戻しつつある。この9月には若手組合員を核とする「再生検討委員会」が立ち上がり、次世代に向けた商店街づくりに道筋が見えてきた。ソフト事業同様にハード事業においても、この若者の力を大事に育てていくことが、商店街にとって重要な使命であると痛感している。

(山形市中心商店街街づくり協議会会長。写真はみちのく阿波踊り開会式より)



今月の表紙

「もみじ公園」(山形市東原町)

ふるさと画家・上野啓太氏作。「わが町」をテーマに、イラストでまちおこし運動を行っている「やまがたマーチング委員会」(事務局・㈱大風印刷)提供。